

## 校名：静岡大学教育学部附属浜松中学校

所在地：〒432-8012 静岡県浜松市中区布橋三丁目2-2 電話番号：(053)456-1331

記載日：2016年5月9日 記載者：小南 陽亮 記載者役職：校長

### 貴校の校風、おおまかな特色について：

本校は、学校教育目標『「質素・清潔・品位」を体現する学校の創造』を掲げ、自己の力を精一杯発揮して学ぶことの喜びや価値を実感し、様々な知識、技能、見方・考え方・感じ方などを伸ばしながら、生涯にわたって自己や他者、社会、自然をともによりよくしていこうとする生徒の育成を目指している。

生徒にとってこの「質素・清潔・品位」が学校生活すべての基準であり、それを基に、生徒会が中心となって代々受け継がれた「より高きを目指せ！常に崇高であれ！」という合い言葉の具現を図ろうと、一人ひとりが自主的、創造的な活気ある学校生活を送っている。

教科の学びは、各教科の本質的な価値に迫る学習ができるよう、学習材やその配列、学習活動を「学習のくくり」として編み直し教科カリキュラムを編成している。

### 貴校の卒業生の活躍状況について：

本校は開校以来、地元の様々な業界を支える名士を送り出してきた。さらにその卒業生も、自分の子どもの入学を強く希望するという状況にある。その理由の第一が、生徒の学力保証と成長保証の両全を目指す教育を目指しているからである。そのため、卒業後は、高い志をもってほぼ全員が高等学校・大学にまで進学している。

卒業生の活躍状況については、追跡調査は行ってはいない。しかし、同窓会組織がしっかりとしており、年1度の同窓会や5年毎の同窓会名簿の改訂の時に、卒業生の動向を把握することができる。それによると、医療関係、代表取締役、自営業等の職種に就く卒業生が多く見られ、地域社会を支えている。

### 貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校に勤務した教職員については、OB・OG組織「あけぼの会」があり、年に1度の交流研修会開催の際に追跡調査を実施している。

本年度の調査によると、現役の教職員57名中管理職等の役職に就いている教職員数は、教育長1名、校長10名、教頭10名、主幹教諭5名、指導主事2名、大学准教授1名となっている。また、その他に、各学校において教務主任や研修主任を担っている教員も多数である。さらに、管理職に就く前に指導主事に就いていた教職員も多く、本校勤務経験者が地元の教育界において活躍している状況が伺える。

また、定年を迎えた旧教職員には、地元の大学において客員教授となって教鞭を執る方も少なくない。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

附属浜松中学校では、これからの時代を生き抜くために必要な資質・能力を身につける教育を基盤として、以下の特色ある取組を行っている。

#### 1. 先進的な理数才能教育の展開と地域における拠点化の試み

これからの科学技術を担う人材と、それを活用・運用できる人材を育成する目的で、「浜松トップガンプロジェクト」を中心に、独自の理数才能教育を展開している。この教育では、生徒の科学技術への理解・意欲を深めることをねらいとし、大学、附属浜松小学校、公立学校、民間企業などと連携して、大学教員による課外講座、民間企業開発現場での体験、高校の科学部との交流、小中連携の講座など、多様な実践を行っている。さらに、これらの取り組みへの参加を公立学校にも呼びかけ、地域における理数才能教育の拠点となることを目指している。

大学教員による課外講座では、最先端の科学の内容を含め、中学校では学習しない内容を実験・実習を伴って講義し、参加者の科学への興味・関心に強い刺激を与えている。また、アメリカ人の特任教授を講師として、全て英語による授業を実施し、科学的な内容の英語でのコミュニケーションも体験できるようにしている。

民間企業・他大学との連携では、ヤマハ発動機においてCADシステムの操作を体験し、エンジン部品の設計を行うなど、中学校では到底扱うことができない高度な技術を体験し、科学技術の実際に触れている。また、東京大学大学院農学生命科学研究科附属水産実験所が主催する研究発表会に参加し、専門の研究者が行った成果のディスカッションに加わることで、研究テーマの見つけ方や探究の仕方を学んでいる。

高校科学部との交流では、SSH 研究開発校に指定されている高校を訪問し、科学部で行っている研究のプレゼンテーションや高校生とのトークなどを行っている。この経験は、科学的な探究活動についての学びになるとともに、年齢の近い高校生の研究成果に触れることで、高校生活への展望も広げている。

小中連携の講座では、中学生が講師役となり、中学校で行う実験を小学生にわかりやすく教える講座を行っている。参加した中学生にとっては、深く理解しないと教えることはできないことを体験し、科学技術を身につける術を会得する機会となっている。また、小学生には、中学校で行う内容を先取りして学ぶことができるとともに、中学生になった時の目標を見つける機会になっている。

以上の活動を附属学校内での教育に留めず、附属学校が地域における理数才能教育の拠点となるようにするため、これらのプログラムへの参加を公立中学校・小学校にも呼び掛けている。平成27年度には、課外講座等に公立中学校から計43名、公立小学校から計16名の参加を得た。また、校内緑地を科学的に観測・研究する試みを近隣の浜松市立中学校でも実施することを勧め、双方で比較できる探究活動を平成27年度から開始した。この活動に関連して、附属浜松中学校と公立中学校の生徒が協力して、浜松科学館の科学イベントにおいて研究内容の発表と観測方法の実演を行っている。さらに、公立学校の児童・生徒も含めて、理科での探究の成果が認められ、それを発表できる場を設けることは、科学技術の芽生えを確実に促すことになると考え、独自に「トップガン賞」を創設し、自由研究の作品を対象に、小学生と中学生それぞれに、最優秀賞1点と優秀賞2点を選考して表彰している。平成27年度最優秀賞には、小中ともに公立学校の児童・生徒の作品を選び、その表彰式では、最優秀作品のプレゼンテーションが当該の受賞者によって行われている。

このような取組は全国でも先進的なものであり、次世代人材育成事業の一つである科学の甲子園ジュニアにおいて本校チームが2年連続で県大会優勝・全国大会出場するなど、その効果が現れつつある。さらに、この理数才能教育では、理科と数学だけでなく、英語、国語、美術などとも結びつけ、多様な才能の育成を目指している。

## 2. 海外体験学習によるグローバル人材の育成

海外体験を伴う能動的な学びの実践によって、グローバル人材の育成に資する学習の発展についても、先駆的に取り組んでいる。その実践としては、国内での体験学習を手始めとして、海外体験学習を主な内容とする教育を総合的な学習の時間で行っている。

国内での体験学習では、信州での体験学習や地元の人・団体との交流によって、国内の産業、伝統・文化を維持・発展させる上での課題や地域の環境をよくする課題などを、生徒自らがみつけるようにしている。この体験学習では、交流先へのアポイントメントなど交渉も生徒自らが行き、身近な地域で生活を支えている人々の働く施設や活動の場を訪問することにより、生徒の社会性も高めるようにしている。

ハワイで実施する体験学習では、現地小学校において英語で日本文化等を紹介する交流活動、現地で活躍する日本人の海外での仕事をとおした生き方をインタビューしたり現地のアメリカ人を訪問したりして「よりよく生きる姿」を追究する調査探究活動、他国の文化、社会、生活を学ぶ姿勢を磨くためのアメリカ人宅でのホームステイなどを行っている。このような多文化共生社会であるハワイの人々との交流は、世界の中での日本人としての自分を実感し、自分の生き方を考える機会になっている。

これらの体験学習によって、生徒は、国内と海外での実情を比較しながら、社会参画をめざそうとする態度を養っており、国際的な視野で活躍できる人材の素地を育成している。さらに、生徒は、学習における課題を自ら考えて設定し、その内容をまとめてポスターセッションとして外部にも公開・発表している。これによって、単なる体験で終わらずに、体験や探究で得たものを他者にわかるようにとりまとめて伝える能力も鍛えられている。

## 3. 保護者との連携による人生の目標探しを支援する「夢講座」

多感な年頃である生徒に対して、人生の目標探しを支援する目的で、さまざまな分野で活躍する人を講師とする講座を「夢講座」と称して年5回程度行っている。この講座は、学校と保護者が連携して実施しており、基本的には、附属浜松中学校のOBを講師として招いている。講座では、講師はどのようにしてその分野で活躍するに至ったかを語ってもらい、その活動の内容についても具体的に説明してもらっている。講師が活躍する分野は、経済、社会、文化、科学技術、芸術にわたっており、できるだけ多くの生徒が人生の目標を探すヒントを得られるようにしている。

この講座の企画は、保護者が主として行っており、学校での教育活動に保護者が積極的に参加する先進的な取り組みにもなっている。

**地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：**

本校では、今求められる資質・能力の育成を図ると共に、次期指導要領の改訂に向けての教育界の動向を見据えた研究に力点を置いている。また、大学の附属学校としての強みである大学関係者との共同研究にも取り組んでおり、そして、その成果を地域の公立学校に公開することで、研修の機会を提供している。

また、年1回の研究発表会だけでなく、浜松市の新採2年目教職員の公的研修会の開催要請を受け、授業公開・教科別協議会に協力している。その際、本校教員だけでなく、共同研究者である静岡大学の教員も招聘し、教科教育を研究している専門家からのアドバイスを受けられる機会を作り、大学と連携したより質の高い研修の場を提供している。

さらに、教科の自主研修会を、広く公立学校の先生方にも呼び掛け、誰でも参加しやすいよう夜間に実施している。その際には大学の教員の協力も得て、講話や教材研究・教材作りなどにも取り組み、地元の教職員の資質向上に寄与している。

その他、本校教職員が異動する際には、県西部地区の市町教育委員会の指導主事や各校の研修主任、教務主任等の役職に就くことが多く、教育について学んだ最新の研修成果を地元の教職員に還元することで、地域に貢献していると考えている。

**附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：**

これからの教育で育成すべき資質・能力として提起されている21世紀型能力を構成する思考力、基礎力、実践力については、附属浜松中学校では、昭和34年の研究主題「教科の系統的指導への歩み」から現在にいたるまで、それら3つの力を育成に直接結びつく教育研究を先行して行ってきており、その成果を公表してきた。このように、附属浜松中学校は、時代が教育に求めるニーズを先取りし、先進的な教育をいち早く実践することを地域の中核となっていてきており、その役割は今後も変わらない。それに加えて、附属浜松中学校で取り組んでいる理数才能教育やグローバル人材育成の試みは、附属学校ごとに特色をだし、地域の要望にも応える新たな教育活動であるといえる。これらの新たな活動で重要な点は、附属学校内での活動にとどまらず、地域の教育や社会との連携を積極的に行っていることである。例えば、理数才能教育では、既述のとおり、公立の児童・生徒も参加するプログラムを開発・実践しており、さらには、公立学校の教諭が自主的に授業の研究ができる内容も検討している。グローバル人材育成では、海外体験学習を実施できる公立学校は少ないかもしれないが、附属学校が実践した内容を基に、国内だけでも実施可能なプログラムを開発できる可能性がある。このように、地域への成果の還元を十分に考慮した教育研究や実践を行うことができる点が、附属学校がもつ大きな役割であり、附属浜松中学校は長年にわたってその役割を果たすとともに、新たな活動にも挑戦し続けている。